

# ま・な・び 記録帳

## 〔佐々並市について〕

『萩往還歩く①』

### 「萩往還へのあこがれ」



佐々並市の集落

今日は、佐々並市（ささなみいち）を出発して、明木市（あきらぎいち）を通り唐柵（からひふだばあと）まで歩くことにしました。峠越えはあるものの全体的に山から海に向かって下る約19kmの道のりです。  
：その前に、出発地の佐々並市について学ぶために、一週間に事前研修（散策）しておいたので、せっかくなので一文添えておきます。



萩往還おもてなし茶屋（旧小林家住宅）からの景観。

## 〔佐々並市～明木市〕

午前九時前に道の駅あさひバス停に降り立ち歩き始めました。ありがたいことに、数年前に萩から山口まで二日間で歩いた経験のある友人が同行してくれました。心強いし楽しさも共有できました。

佐々並市の集落を通り抜けた後には存在していたそうで、農耕や炭焼きなどがなされていました。江戸時代に入り萩往還が整備されると、藩主が休憩する御茶屋が設けられ、宿場へ変遷しました。

この先しばらくは、国道二六二号と重なる部分もあり、普段の我が身を忘れエンジン音と排気臭に嫌悪感を抱きながら歩きました。



（

萩往還の集落を通り抜けた後は急勾配であるため、雨水によって地面が荒れるのを防ぐためと思われる石畳が敷かれています。幅約1mの石畳と、道の脇には側溝も整備されていました。先人たちの苦労の結晶を踏みしめることに感慨を覚えずにはいられません。



一升谷の石畠。

ここは急勾配であるため、雨水によって地面が荒れるのを防ぐためと思われる石畳が敷かれています。幅約1mの石畳と、道の脇には側溝も整備されていました。先人たちの苦労の結晶を踏みしめてることに感慨を覚えずにはいられません。

現在は杉林ですが、当時はどんな木々が茂りどんな雰囲気だったのでしょうか。



一升谷（十合目）  
石畠



落合の石橋（江戸時代）  
(長さ 2.4m、幅 1.7m)

峰を越えて下っていくと落合という集落に入り、沢越えの石橋を渡ります。

名前の由来は、長く急な坂道にとりかかって炒り豆を食べ始めると、登りきるまでに一升なくなってしまうことからなのだと。

一升谷は、今回の区間の最難所となる約3kmの長い坂道です。ただし、萩を起点とした場合は下りとなります。（→私たちは下り）

名前の由来は、長く急な坂道にとりかかって炒り豆を食べ始めると、登りきるまでに一升なくなってしまうことからなのだと。

萩往還（おうかん）は、江戸時代に萩城下から中国山地を越え、山口を通過して三田尻港（現防府市）まで続く街道として整備されました。毛利の殿様が参勤交代に使つたため「御成道（おなりみち）」ともいわれ、商人や農民、そして維新の志士たちも往来しました。総延長は約53kmあり、石畠や峠道などが昔のままに残る場所もあります。

森林の中を歩くこと、史跡を訪ねること、そして萩が好きな私にとって、宝物のようない歴史の道『萩往還』です。興味を抱き続け、ついに念願の一歩を踏み出すその日がつってきたのです。

佐々並といふ地名は平安後期には存在していたそうで、佐々並といふ地名は平安後期には存在していたそうで、農耕や炭焼きなどがなされていました。江戸時代に入り萩往還が整備されると、藩主が休憩する御茶屋が設けられ、宿場へ変遷しました。

江戸や明治期に建てられた町家も多く残り、赤い石州瓦も印象的で、重要な伝統的建築物群保存地区の指定を受けています。

佐々並市の集落を通り抜けた後は急勾配であるため、雨水によって地面が荒れるのを防ぐためと思われる石畳が敷かれています。幅約1mの石畳と、道の脇には側溝も整備されていました。先人たちの苦労の結晶を踏みしめてることに感慨を覚えずにはいられません。

ここは急勾配であるため、雨水によって地面が荒れるのを防ぐためと思われる石畳が敷かれています。幅約1mの石畳と、道の脇には側溝も整備されていました。先人たちの苦労の結晶を踏みしめてることに感慨を覚えずにはいられません。

現在は杉林ですが、当時はどんな木々が茂りどんな雰囲気だったのでしょうか。

萩にあしあと残そうよ [ま・な・び 記録帳] 令和2年(2020) 11月25日 発行:大塚好一

下合目からカウンタダウンで下っていきます。やがて道は細い沢に沿い、水の調べが心地よいものでした。そして景色が開けた時、ちようど正午を知らせる防災無線が鳴り響きました。明木市に到着、ここまで約九kmです。



〔明木市について〕  
明木市は、萩往還と萩から下関に通じる赤間関街道（あかまがせきかいどう）の宿駅として栄えました。交通の要衝であるとともに、萩城下に供給する薪炭や農産物などの生産も盛んな地域でした。

随所に設置されている青い方向標識のおかげで、地図等がなくとも安心して歩けます。

また、ところどころに建つ石のモニュメントが、景観に彩りを添えています。



彦六さん (左)  
& 又十郎さん

☆ひと休み☆ 明木の恩人のお話。萩城の石垣組みに抜群の力を發揮した彦六と又十郎の二人は、殿様から特別の褒美を受けることになりましたが、私欲に走らず明木の里人があがく「口屋錢」（税金）の免除を願い出たそうです。

休憩所として「乳母の茶屋」を利用します。殿様が休憩した御客屋のあつた場所で、交流施設となっています。ここは集落内ですが、山中の道沿いにも三か所、トイレ付きの休憩所がありました。良く整備された道と感心します。



室内で休めるのが嬉しいです。

＊  
川沿いをしばらく歩いた後、上り坂が始まります。そして県道を越え旧道を越え、悴坂（かせがざか）駕籠建場跡に辿り着きました。萩を出て最初の上りを終えたところとなり、殿様一行の休憩所です。



松陰先生の歌が刻まれています。

＊  
「もうすぐ涙松ですよ。いいよ御城下が見えますね。」と思わず友人に言葉を発しました。この地は萩の町並みが見える境目にあたり、旅人が萩から出る場合は別れの涙、といわれています。

＊  
「もうすぐ涙松ですよ。いいよ御城下が見えますね。」と思わず友人に言葉を発しました。この地は萩の町並みが見える境目にあたり、旅人が萩から出る場合は別れの涙、といわれています。

＊  
は、本来この日のような時間が流れおり、現代社会がいかにせわしいかを考えさせられます。ただし、それが良いとも悪いとも言えないのが現実。時折こういう体験をするのは良いことですね。

（歩行日 一月二一日）

## 〔明木市～唐樋札場跡〕

向かいには庶民が休憩するための茶屋もありました。



駕籠を置く台が2つ。奥には御廁も復元されています。

土の上や石畳を歩くことの多かった一日も、最後はアスファルトの道となります。萩駅の前を通過し、橋本橋を渡るといよいよ三角州に入りました。そして、萩往還の起点である唐樋札場跡に到着しました。ここには幕府や藩からのお触れが掲げられた高札が復元されています。



唐樋札場跡の高札